

韓国オプティカルハイテク闘争 3・27大阪集会

遠征67日完遂、次へ

3月27日・大阪市内で、韓国オプティカルハイテク（OP）労組日本遠征団は、日東電工への雇用継続と争議解決を求める（1月中旬から）の「本社行動の締めくくりにあたって、その67日にわたる最終日に遠征闘争報告集会を行なった。会場「エルおおさか」午後2時には、おおさかユニオンネットワークと共に60名以上が結集し、報告集会は会場一杯の熱気のなか開催された。

報告集会に先立ち、この日も連日行動の一環として、早朝8時から日東電工本事業所での情宣行動を40名の参加で行なった後、正午からは大阪駅前グランフロント大阪前で、大阪本社抗議行動が50名で開始された。アピール発言のち本社に入るグランフロント3階へ向けた直接行動を、悪質なガードマンの妨害を跳ね除け闘い抜いた。日東電工はいくつものように33階エレベーターを止めさせないよう暴行を行なった。一切の抗議を、また要請書をも一切受け取らないという悪質な企業なのだ。

参加者は怒りも新たに、9階ホールで抗議アピールを行なったあと、「エルおおさか」へ向かった。

報告集会では、「共に闘ってくださった日本の皆さん、ありがとうございます」

狭山事件

石川一男さん逝去 第4次再審闘争勝利を

狭山事件の無実を60年余訴え、再審開始を求め続けてきた石川一雄さんが3月11日、狭山市内の病院で逝去した。86歳であった。

新証拠の万年筆インク鑑定等の採否が山場を迎えるなか、石川さんが昨年からの体調を崩され、何としても元気に内に再審開始の決定を、と皆が



石川一雄さんと早智子さん

うに扱われても、こうして生きている労働者がいることを知らしめるのである。そして日本の支援の皆さんに感謝します」と締めくくった。

最後に遠征団から、この遠征闘争は今回で終わりとしたが、今後も引き続き遠征を準備し、闘い続けるという強い言葉があった。われわれは遠征団の勝利への強い決意に、連帯し、本社のある大阪で一層の熱い闘いを繰り広げていかねばならない。

日東電工高崎社長は争議解決を断絶せよ！

（大阪S通信員）

（2面から）

第三段階、グローバル化の時代、特に社会主義圏の崩壊以降決定的な事柄に、同時にやはり不均等発展の結果アメリカ一元体制が崩壊し、また植民地から解放された途上国がグローバルサウスとして台頭し、不安定な無極化の時代に入っている。

アの変革には三つのコースがありえた。第一は上からの二つの道のプロシヤ型を通した（反）「革命」いわゆるボナパルチズムの変革である。第二はメンシエーキーやカデットの資本主義的民主主義的変革である。第三は社会主義革命への永続革命のコースである。

その階級意識は資本と労働者の関係、経済闘争だけから形成されたのではなく、階級関係を「総括」する国家と諸階級の関係、その中の労働者階級の位置と役割の認識「ヘゲモニー意識」によって形成される。そのためには、ブルジョアジーや他の階級の政党をはじめとするヘゲモニー装置に反対する労働者階級のヘゲモニー装置「党を中心とした陣形を必要とする。そのような意味で「外部から」持ち込まれねばならない。レーニン「何をなすべきか」の「外部注入論」は最近評判悪くス

味での外部からの「外部注入」が必要であるという事である。言うまでもなく労働者階級の意識的分子であるという意味では「内部」ではあるが。

④日本の（また多くの世界的）新左翼運動は、以上のようなマルクスの「永続革命論」の止る「立場」になく、結果として全人民武装を考へる。現代の条件を考へるとき、考慮に入れるべきことはやはりグラムシの提起であろう。

グラムシが言うように、それは西方では大衆の蜂起を妨げ、あるいはそれら吸収する市民社会ブルジョアジーの諸ヘゲモニー装置の発展があり、東方に比べ容易ではないという事である。それを突破する陣地戦が必要だという事であった。

グラムシの名譽のために付言すれば、グラムシは後にトリアンテリイ構造改革論者によってゆがめられたような平和革命論者ではない。その「力関係のモメント」論文を読めば、最終的に軍事的モメントももちろんその前提は政治的モメントである。凡そ、革命が議会によってなされたことは、なされたように見えることもあるが、その背景に大衆の蜂起がある。評議会と蜂起を通じて人々は自己の力を確信し自治を学び自身を変革する。この自己変革なしに人民の統治はない。更に、議会の統治は、既存の暴力装置や官僚組織を根本から作り変えることは不可能だという事からも蜂起と評議会が必要である。軍隊を全人民武装に変えるというコミニオン原則の一つは、空想的に見えるかもしれない。確かに、ロシア革命の時ですら既存の軍隊を利用せざるを得なかったし、まして現在の高度に発達した技術で構成されている軍隊である。だが、一定の人民の武装によって既存の軍隊を統制するものと

と、ロシア革命の時ですら既存の軍隊を利用せざるを得なかったし、まして現在の高度に発達した技術で構成されている軍隊である。だが、一定の人民の武装によって既存の軍隊を統制するものと

思っている矢先の訃報であった。無念と言ふほかはない。

狭山事件は、違法な取り調べと証拠捏造の冤罪事件であるだけでなく、部落差別にもついても石川青年を犯人にでつち上げた権力による差別事件であった。この権力犯罪との闘いに、被害者となる。新証拠は再び提出される。

石川一雄さん追悼集会は4月16日、東京神田の日本教育会館、午後1時。主催は部落解放同盟、狭山再審を求める市民集会実行委。

5月23日・午後1時、1963年別件逮捕の「5・23狭山デモ」には、東京・日比谷野音で狭山事件の再審を求める市民集会。第4次再審闘争の大衆的な開始宣言となる（A）

①マルクス、エンゲルスによる1848年革命時点での永続革命論は、エンゲルスの総括の通り「一旦放棄された。資本主義に生命があり永続革命を貫徹する客観的条件がなかったのである。いうまでもなく、だからとて手をとこまねいて時期を待つのではなく、その準備としてのプロレタリアートの成熟を促す組織が必要であり、それは主として労働組合と政党によってなされた。

②帝国主義時代の到来とともに革命の現実性が日程に上り、それと共に永続革命は復活した。だがそれはその前期に準備された組織戦を媒介にした、いわば止揚された永続革命論である。それはグラムシが述べているように「イリツチ」レーニンに体现された。

③その意味は次のことである。レーニン（ロシヤ）に即していえばロシヤの変革には三つのコースがありえた。第一は上からの二つの道のプロシヤ型を通した（反）「革命」いわゆるボナパルチズムの変革である。第二はメンシエーキーやカデットの資本主義的民主主義的変革である。第三は社会主義革命への永続革命のコースである。

④日本の（また多くの世界的）新左翼運動は、以上のようなマルクスの「永続革命論」の止る「立場」になく、結果として全人民武装を考へる。現代の条件を考へるとき、考慮に入れるべきことはやはりグラムシの提起であろう。

グラムシが言うように、それは西方では大衆の蜂起を妨げ、あるいはそれら吸収する市民社会ブルジョアジーの諸ヘゲモニー装置の発展があり、東方に比べ容易ではないという事である。それを突破する陣地戦が必要だという事であった。

グラムシの名譽のために付言すれば、グラムシは後にトリアンテリイ構造改革論者によってゆがめられたような平和革命論者ではない。その「力関係のモメント」論文を読めば、最終的に軍事的モメントももちろんその前提は政治的モメントである。凡そ、革命が議会によってなされたことは、なされたように見えることもあるが、その背景に大衆の蜂起がある。評議会と蜂起を通じて人々は自己の力を確信し自治を学び自身を変革する。この自己変革なしに人民の統治はない。更に、議会の統治は、既存の暴力装置や官僚組織を根本から作り変えることは不可能だという事からも蜂起と評議会が必要である。軍隊を全人民武装に変えるというコミニオン原則の一つは、空想的に見えるかもしれない。確かに、ロシア革命の時ですら既存の軍隊を利用せざるを得なかったし、まして現在の高度に発達した技術で構成されている軍隊である。だが、一定の人民の武装によって既存の軍隊を統制するものと

★編集部お知らせ

本シリーズ「紙上討論」左派団結・統合」で、の尾澤孝司さん寄稿「ランパ政権の発足と日本の変革運動」その3は、次号掲載予定。

また、連載「広がる先住民の闘いと深まる先住権思想」は今号休載。